バーチャル YouTuber 彩翅モルフォは鮮やかに舞う。
——夢のさめるまで。

誰彼　誰何

幼いころより『醜いもの』に激しく耐えがたい嫌悪感を覚えることが多かった。

とりわけ、無力で、無抵抗で、媚びへつらうだけが取り柄のような存在。それらは僕の精神に強い苦痛と抑えきれない嗜虐心を与えて仕方がなく。

そして、僕にとってその象徴は——。

※※※

祖父の畑でそれを初めて見つけたとき、僕は火花のような嫌厭（けんえん）の情に襲われたことを今でも覚えている。

切り落とされた小指のような醜形でいて、熱湯を撒かれた幼子のように無様に這う、そのおぞましさ。吐き捨てられたチューイングガムを彷彿とさせる光沢の弱い外皮は、かろうじてその身の肉を包んでいるだけが精一杯。外敵への抵抗の術を持たない、弱弱しさ。草葉に隠れて生きながらえるだけの栄養をつつましく食む悲惨さ。

その全てが生物として傲慢だと感じた。まったくもって醜悪な存在。

僕は考えるよりも先にアオムシたちの群れ成す草葉を踏みつけていた。脊髄反射だった。

それから僕は毎日のように畑へ通った。まるで義務のように。

中学の入学祝いに母に贈ってもらった新品のスニーカー。その透き通るような純朴な白さをもって、僕は自分の欲望のままに、何度も踏みつけた。

結局、その夏の間に僕は計 124 匹のアオムシを踏み潰した。

※※※

スニーカーのソールの色がすっかり変わってしまうと秋が来て、僕は父の部屋で男性向け雑誌のグラビアページを見つける。扇情的なポーズで豊かなバストを強調してこちらに微笑んでいる少女。偶然だが、それを手にしたときに奥歯に電流のような刺激が駆け抜けた。性の目覚めだった。

本能的に。

僕はそれで性欲を満たそうと努めたけれど、どうしたって次第に体熱が冷めていくために、それが叶うことはなかった。脳の命令と、体の制御がかみ合わず、何度も頭をかしげた。

その理由はついぞ分からなかった。

虚しいだけの秋が過ぎ、冬休みが始まると僕は蝶の図鑑を 1 冊手に取ることになる。たまたま本屋で目についただけのことだったが、その本を開いた瞬間にあの奥歯の電流が再現された。不思議なことに、今度は体の方も正常に反応を示していた。

すぐに少ない小遣いを全部はたいて購入すると、２週間を使って念入りに読み込んだ。秋には感じることのできなかった熱を、僕は全身が帯びていることを感じた。

そうして冬休み最後の日、父親の部屋からあの雑誌を盗み、もう一度巻頭のグラビアページを開いた。ほとんど裸体のようなモデル——。僕はそれに蝶図鑑からデザインナイフで切り取った四枚の羽をコラージュした。

その青い蒼い碧い翅は、驚くほどに少女へ馴染んでいった。まるで最初からそこに生えていた器官かのように。

接着面から溢れ出た木工ボンドは、彼女を束縛する蜘蛛の糸か、もしくは精液のようだった。

僕は帳が落ちるまでうっとりと自室のベッドでそのページを眺め、夜が訪れると 4 回マスターベーションをした。

※※※

それから 7 年後。

僕は電脳空間でその時と同じような情景を見ることになる。持つべき器官を背負った、華奢な長身。

彼女はその翅を少し震わせながら——それと同時に鱗粉の流星が微かに降りそそぐ——花弁で休んでいるかのように静かで、気高く存在していた。その静謐（せいひつ）な顔で、僕をちらりと認めると、ただ無表情のままに、一度だけ首をかしげる。

見惚れた僕は、モニターも YouTube のインターフェースも忘れて、彼女へと手の平を伸ばしてしまう。

その瞬間から、僕の現実は更新されて。

そして、僕はまた、奥歯に電流を、全身にあの熱を帯びるのを感じる。

——バーチャル YouTuber、彩翅（さいばね）モルフォ。

これは彼女という夢の物語。

※※※

モルフォ蝶は南米を中心に棲息する大型の蝶である。その学名 Morpho はギリシャ語で『美しい』を意味し、神話において美の女神アフロディテに冠される形容語句でもある。

その翅は宝石にも例えられるほどに鮮やかな青さで、金属表面とも見紛うほどに妖艶に色味が遷（うつ）ろう。

——構造色。

モルフォ蝶はその翅に色素を持たない。その翅が色彩を持つのは、表面に刻まれたスリットが、特定周波数の外光を干渉・反射させるためである。

初めて見た時から、その幻想的で、どこまでも蒼い翅に焦がれていた。

そして、同じ翅をもつ彼女にも——

※※※

９時間の窒息。

首を掻きむしりたくなるような、閉塞と抑圧。

この校舎という空間は、僕から酸素と水分とを奪う。……止まない目眩。数学教師の上方には、さきほどの脇見から 3 分しか進んでいないくすんだ壁時計。AM 11:45。いつもこの頃になると、体の震えが止まらなくなる。脛が痙攣して、震度 1 で揺れ動く教科書。次第にマグニチュードは増す。

ならばいっそ、派手に。

喚いて、暴れて、この教室から駆けていくことさえ渇望する。

何故、周囲の人間たちはこれほどに静かに 50 分という時間をこの半畳ほどの空間に身体を収容し続けることが可能なのだろう？　僕はいつまでも分からないままで。どうしても、ここから脱したくなる。

かようにもがいている僕をこの無機な木目調の椅子と机に縛り付けるというのは、社会性という名の拷問に他ならず。

思うに、僕の生活ルーティーンは何もかもがここに適していないのだ。そんなことは当たり前で、1 教室で 40 人、1 学年 5 クラス 200 人、1 学校 3 学年 15 クラス 600 人をたった一つの校則とスケジュールで規定することなんてどだい不可能で、そんなことは僕のような齢 16 の一学生でさえ分かっていることなのに、ああ、喉が渇いて。

可能であるならば、5 分毎に水分を補給して、15 分毎に机の周りを一周だけ歩かせてほしい。そうして、始業は夕の 5 時から。

それだけだ、僕が望むのは。たったそれだけ。

それだけさえ、満たされずに、僕は喉が焼け付くような感覚とともに、この監獄を生きている。

ああ、この苦痛には、何か既視感がある。

そんな思案に浸っていると 12 時となり、囚人にも一時的な開放の合図。

同時に。僕は半分ほど残っていたボトルの水を流し込む。この体質には自分自身、うんざりしている。

抑圧を感じると、僕の呼吸器は異様なほど脱水されていくのだ。次第に襲い来る、焼けるような咽頭の痛みと痙攣。水気が薄くなって粘度の増した不快な舌の上の唾液……。

そんな僕の懊悩も知らないで、僕の頭上から唐突に気障りな声が注ぐ。

「ウワくーん。昼ごはん、購買？」

下卑た声の主は、不愉快な薄ら笑いを浮かべた佐藤だった。何を言わずとも、その眼をもって僕を見下しているのが明白で。言葉を交わすだけで気分を害する為、僕は出来るだけ避けるようにしている、のだけど。それにも関わらず、彼の方からは何かと僕に構いたがる。彼の存在こそ、僕がこの教室でうまく呼吸ができない要因の大きな割合を占めている。

「おーい？　聞こえてる？　今日も購買行くんでしょ？」佐藤は少しイライラした口調で再度問う。

そうだけど。僕は相手に届くかも分からない小声で返答する。小さく舌打ち、「聞こえてんならさっさと答えろよ」だが、すぐに作った薄笑い。そして、佐藤の握りこぶしが開かれて、僕の前にバラまかれる、硬貨。

「じゃ、カフェオレとツナマヨ」

僕は何も返さない。ただじっと、机の上に散らばった220円を眺める。ぴりぴりと、喉が震えて。

……水分が足りない。

※※※

ビニール袋を両手に購買から帰ってくると、教室の出入り口を巨体が塞いでいる。何事かと廊下の少し離れた場所で観察を始めれば、その肥満体の肩越しになんとなく状況は察しがつく。

通行不能なドアに一番近い場所で、女子生徒たちが三人ほど机を寄せ合って弁当を広げている、が、そのうちの一席は彼女らのものではなく。それは、どうやら机の主が僕のように購買へ出かけている間に奪取したもののようだ。

そして、今、教室への帰還を果たし、不法占拠に異議を唱えようとしているその被害者。

「あの、えへ、えっと……」

短い四肢。

縮れ絡まった脂っぽい前髪。

常に相手を窺うような、品位のない瞳。

膨れた頬肉に斑紋のように浮かぶそばかす。

鼻にかかったような活舌の悪い喋り方。

——馬場尚子。

反射的に浮かぶのは「目に入れてしまった」という後悔。彼女を見ていると、決まって肺が熱くなる。全身が火照って、口の端が隠しようもなく歪んでいくのが感じる。それは、ミカンの葉を裏返したときに、びっしりと身を寄せ合って蠢く毛虫たちに気づいたときによく似ている。

「席、私ので、へへ」要点を得ないくぐもった喋り方。伝えたいことも分からないまま、気味の悪い愛想笑いを繰り返す様は、余計に相手をいらだたせる。

「席……。そこ、使ってるんだよね。つ、使いたいんだよね。いや、うん、あ、貸す……。あ、へへ、昼の間使ってください。あとで、ふへ、後で返してくれればいいから、へへ」

……五限が始まれば勝手に女子たちは自席に戻るだろうに、もしかしたら最期のは馬場尚子なりの軽い冗談だったのかもしれない。

だが結局、座っている女子たちは終始、自分たちの輪の中での会話に夢中で。ついぞ馬場尚子のことなど最後まで気にもかけなかった。

当然だ。足元を這う一介の虫けらを意識する獣はいない。

「馬場ちゃんさ、今日も絶好調じゃん。おもしろー」いつのまにか僕の横には佐藤がいて、僕が持つビニール袋から、所望した品々を漁りながら、その一連のやりとりをいつも通りの薄笑いで眺めていた。

でけえのに入口で止まってんじぇねえよ邪魔だな、なんて小言が廊下で飛び交う。

当の馬場尚子はというと、ぎくしゃくとした動きのまま転回すると、僕の脇を通って教室を後にする。何処にも居場所なんてない彼女は、きっとこの後トイレにひたすらこもるか、ひたすら校舎を忙しなく練り歩くかをするのだろう。

廊下に消えていくその後ろ姿を眺めながら、佐藤はけらけらと笑う。
「あの子、すげえよね。人をイライラさせる天才だよ」
その通り、馬場尚子は、人を苛立たせることにおいて、右に出る者はいないほどの才の持ち主だった。

暴力誘発性（ヴァルネラビリティ）。

そういう人間は、確かにいる。人が根源的に持つ獰猛さを、無意識で引き出してしまう体質。その一挙手一投足が、こちらの神経を逆撫でし、嗜虐心をくすぐる。
日々の大半をクラスという村社会に生きる僕たちは、彼女のような変種に敏感だ。集団として、一匹のアウトサイダーをどう扱うか。慎重な判断が求められる。
だからこそ。最初は、辛抱強く彼女と対話を試みるものもいた。
しかし、その数は日ごとに減っていき、ある地点から彼女は全会一致で『異端』と扱われるようになってしまった。
それでも、かつてはそこに均衡があった。目を凝らさなければ分からないほどに薄ぼんやりとした——絹糸の生地のような——均衡。

『我々は彼女に何も施さない。その代わりに何も干渉しない』

だというのに。
ある日、誰かが、その薄皮を静かに裂いた。初めは、当人も気づかない程度のささやかさで。それでもその破れ目は決定的で、不可逆だった。そうして、その破れ目は次第に教室全体に広がっていく。
それでも。……ウチは進学校だ。治安の崩壊した底辺高校ではない。誰も、目立つバカはやらない。
だから、比較的穏やかな方法で発散する。

まったく馬鹿らしい、と僕は思う。どのような手段を用いても、その加虐は正当化されない。自分らの都合のいい巣を編み込むことに必死な、惨めな群体生物たち。
僕は彼らとは違う。たかが数年、一過性の集団生活に帰属など見出さない。馬場尚子がその輪を掻き乱そうが、何の興味も沸かない。

それでも、僕もやはり彼女を許さない。

その容姿、挙動、発声、対応。
そして何より、その無抵抗さが。他者に媚びへつらう脆弱さが。
……ひたすらに醜い。
僕は醜いものを許さない。
僕は美しいものだけを信じる。

美しいもの。
——それはこの世界で彩翅モルフォだけだ。

※※※

これは記憶。

午後二時の灼熱が、幼い僕を確実に脱水させていく。
これは何らかの罰なのだろうか？　とある昼下がり、アオムシを潰すために潜り込んだビニールハウスの中で、僕は死にかけていた。入口を固定していた金具が破損し、密室の中に閉じ込められてしまったのである。
幼い僕には、厚手のポリ塩化ビニールを裂くほどの力も道具も見つからず。
昼の家事から畑へ祖母が戻ってくるまでの三時間、僕は過度の熱中症に苛まれ、取り返しのつかなくなる寸前で救助された。
記憶も混濁した、救出の間際。全ての力を失った僕の掌の上、一匹のアオムシが無関心そうに這っていくのを、薄れる意識の中で眺めていた。
思い出すだけで、水気が引いていく忌むべき記憶。僕の中で脱水と恐怖が結びついたのはあの日からだ。

「ウワくんはさ、僕と友達なだけラッキーだよね。この世界で、一人は悲惨よ？」
佐藤が僕の肩を強めに叩いて、僕はふと我に返る。
「だからさ、明日もお昼、よろしくね」
ああ、そうだ。この息苦しいだけの 9 時間は。
校舎という空間は。
あのビニールハウスによく似ている。

※※※

彩翅モルフォは、僕の日常のカタチを大きく変えた。

半年前、彼女と出会ってから、僕は日々を変動のないルーティーンで生きている。
学校から帰ればすぐに就寝、そしてモルフォがほぼ毎日欠かさずに生放送を行う午前 2 時に間に合うように起床する。配信が始まれば、僕はじっと PC の前に張り付き、その一言一言に耳を澄まし、思い出したかのように時折コメントを落とす。
枠が終わるころには、鳥のさえずりが聞こえ始める。朝の始まり。それから、学校に登校するまでの間に、授業で課された宿題をしたり、手持無沙汰にインターネットで時間を浪費したりする。そして、学校。……言うまでもなく、一日の中で最も無為な時間。

そういえば、この生活を初めてから、僕は家族の顔を見ることが極端に少なくなった。夕食は残されているものを、レンジで温めて、配信中やその後に食べる。風呂は早朝に入る。もう、マトモな高校生の生活からは大きく逸脱しているのだろう。
……マトモな高校生。
そんなイデアが実在するなんて信じていやしないけれど。それでも、クラスメイトたちの世界には。この 21.5 インチモニターの中で蝿のように飛び回るマウスポインタを追いかける僕とは違って、もっと日の当たる場所で、

極彩色の刺激があるに違いない。
　でも僕にはもう、そんなものたちに、何も価値を感じることができない。
　モルフォ以外は全てモノクロームのくすんだフィルターの向こう側。

　偏光板を隔てた僕の世界に届くのは、ただ、彼女のはためかせる二翼の揺らめくような光彩だけ。

※※※

　今日はアラームよりも30分ほど早い起床で、どうにも時間を持て余してしまう。
　配信までに夕食を摂ってしまおうとも考えたけれど、唐突に昼の教室での光景を思い出して、食欲が失せてしまった。
　――馬場尚子。醜悪な存在。
　浮かべるだけで、気分が悪くなる。喉仏がひくつき、乾燥を告げる。僕はマグカップに水道水を満たして、一息で飲み干す。
　この鬱然とした気持ちを抜け出そうと、ベッドから出たそのままの姿に一枚だけ上着を羽織って、僕は外へ飛び出す。

　僕はしばしば、気分を変える手段として、とにかく歩くことを選ぶ。そうでなくとも、日常生活で『じっとしている』ことを最も苦手としている僕は。同じ場所にいるだけで、煙のようなものが顔を覆って、やがて首を絞め始める、そんな錯覚。そんな倦怠から逃れるために、やみくもに身体を動かしてしまう。肌寒い外気は上着から出ている素肌をしきりに撫でる。
　それは、夢遊にも似た、目的地のない徘徊。
　屹立する電柱たちが不気味に浮かび上がる路地は、鬱蒼とした森の奥地を思わせる。時折、雲の切れ間から月光が強く照らす。
　ぱちぱちと頭上で音が鳴れば、街灯の下で虫々の舞踏。極めて不規則に。
　どの個体も光を目指して、執拗に蛍光灯へ飛び込む。その身を削りながら、何度も、何度も。やがて果てて墜落することも厭わずに。
　吸い込まれるようにそんな小世界を見つめていたが、ふと我に帰れば同族嫌悪にも似た不快感に弾かれて、足を速める。そうなれば不思議なもので、この類の夜行が行き着く先は、いつだってコンビニエンスストア。
「陽を排した暗がりの住人であっても、無意識のうちに強い明るさを求めてしまうものさ」
　いつかの彼女の言葉。リフレイン。
　――僕もきっと、あの街灯に集う虫たちと同じなんだ。

※※※

　家に戻っても、どうにも食事を摂る気持ちにはなれなかった。
　コンビニで購入したサラミを無為に食んで、コップにそそいだ水道水で喉の奥へ流し込む。モルフォが来る前の、待機画面を眺めながら。
　同時接続数は11人。
　登録者数850人のモルフォに、この深夜のリアルタイム視聴者数が果たして妥当なのかは分からない。正直なと

ころ、彼女の登録者の多くは配信後に残されるアーカイブを利用している。日が超える前、22:00 から 24:00 ごろに配信時間を変えるだけで、きっと登録者も再生数も倍数は増えるはずなのに。
　配信中にコメントでそれを指摘されても、モルフォは頑なにこの時間の配信枠を変えようとはしない。彼女の口から、その明確な理由が語られることはないけれど。
　僕にはなんとなくわかる。

　彼女はきっと、他でもない僕らに向けて配信をしているんだ。

　居場所のない社会から目を逸らしながら、アテもない彷徨を続けてしまうような。
　車の消えた通りで、単色で明滅する信号の灯を見て安心してしまうような。
　自動販売機の灯さえ鈍らせる夜霧に包まれた、路上の曖昧さに居心地の良さを覚えてしまうような。
　現実から現実感を失って、仮想世界で感情を/感傷を/感触を取り戻すような。
　今この時間、この瞬間に配信を視聴している、

　そんな僕らに向けて。

※※※

「つまりはボクには居場所なんて元よりないのさ。それもそうだ。蝶は巣を作らないからね」

　モルフォはその特徴的なアルト声域で穏やかに言葉を紡ぐ。

「もっとも、キミたちの中には集団に所属するものも多くいるのだろうね。そこを居場所と呼ぶものもいるだろう。学校とかね」

Big Scary Cat　学校なんてくだらないよ。

「やあ、おっきい猫くん。今日も来てくれているね。ところで君は居場所のない野良なのかな？」

Big Scary Cat　僕は何処にも帰る場所なんてない。モルフォと同じだ。

「外界に拠り所がなくても上等じゃないか。ボクらにはここがある」

　そう言うとモルフォは小さく笑み、それが合図かのように背から左右対称に生えた翅が揺れ、周囲の空間が瞬く。
　彼女が微笑むとき、また顔をしかめるとき。その美麗な蒼い翅は感情を示すかのように僅かに震える。それはモルフォの翅のモーションが、彼女の眉毛と連動するように設定されているからに他ならない。気付いているのは多分、僕だけだろうけど。

「キミたちは囚われているのかもしれない。教室、職場、家庭、またはそのいずれでもない悲惨な場所で。それでも、今この時間だけ。今この場所だけは、キミたちはそんな虫籠からも自由に飛びたつのさ。ここは何者にも邪魔

されないヒミツの花園なのだから」

その言葉を聞きながら、僕は徘徊の路地の、屋外照明に集った昆虫たちを思い出す。陽光から逃れてモルフォという灯に集う僕らは、あの光景にぴったりと重なるのだろう。
彼女の言う花園が、実のところ、あんな街灯の下だったとしても。

——そこにモルフォがいるならば。

僕らはくるくると踊り廻る。彼女が四肢を振るう度に世界は色めいて。僕は束の間、実像を取り戻す。
乾きはもう、知らない。
電灯が眠り、信号が秩序を取り戻す、あの忌々しい朝が訪れるまで。

※※※

蝶と蛾の分類に明確な定義は存在しない。
それなのに、人は節足動物門-昆虫綱-鱗翅(りんし)目を見た時に、瞬時に「蝶か・蛾か」を選択して認識する。
細かいことを言えば。
昼行性/夜行性、触角の形状、休息時の羽の扱い方……、便宜上の区分方法はある。けれども、誰もそのような生物学的な分類を経てはいないだろう。

——結局のところ、その判別の根底にあるのは、間違いなく「美しさ」だ。

蝶は美しく、蛾は醜い。
蝶は平原を優雅に舞い、蛾は深夜のコンビニエンスストアのガラス窓に張り付く。
蝶という認識を得た人々は、次に博物館のガラスケースに納められた標本を連想し。蛾を認識した人々は、キッチンの戸棚にある殺虫剤の在庫を思い出している。
人間は無意識のうちに排除すべき存在を、その美しさによって規定しているのだ。

※※※

僕が『美しさ』について考えるとき、その対義として、僕は自然と馬場尚子を想う。
彼女は僕らに決して危害を加えない。
何一つ。
悪臭を放つわけでも、突然叫びだすわけでも、暴れて人を傷つけることもない。
だというのに。
——ただただ醜く、その容姿が、挙動が、存在が、人々の嫌悪感を引き出す。
つまり。

不快害虫(ニューサンス)。

生理的嫌悪は人間の遺伝子に刻まれた本能だ。

伝染病、寄生虫、果てには劣悪とみなした遺伝子……。自らのムラにおけるアベレージから大きく外れた個体を、本能的に排除する。

それは生存戦略であったが、いつの日か快楽を伴うに至った。

だから馬場尚子をからかう人間は後を絶たない。……きっと、これからも。この高校という監獄を抜けても、馬場尚子は自身の醜悪さと付き合い続けなくはいけない。

ならば。

彼女の居場所は、この世界に存在するのだろうか。

※※※

「馬場」

午後一番の現国。僕を含め、意識が朦朧としていた生徒たちは、教師の放ったその鋭い一言で急速に覚醒する。

誰の名前が呼ばれたか。クラス中がお互いに目配せで確認。だが、その輪の中に、該当者はおらず。

当の本人は、自分の名前が中てられたことに周囲よりもさらに一拍遅れて気が付いて、それからパニックのように息を荒げる。そんな様子を気にもせず、教師は言葉を続けて。

「なあ、いつまでそうやっているんだ？　卒業するまでか？」

誰もが同じことを考えていた。

――『ついに』か、と。

馬場尚子は内職の常習犯だ。何をしているのかはよく分からないが、現国に限らず授業という授業で『もう一冊のノート』を広げ、一心不乱、授業以外のことを書きつけることに夢中だ。

成績も平均以下なのにふてぶてしくそんなことを繰り返す態度も、やはり周囲の反感を買っているのだが、当人はそんなことも気づいていないのだろう。結局、教師を含めた大多数の人間が彼女の実情に気づいていながら、見て見ぬふりをしている。すぐ後の受験でバカを見るのはどうせ本人なのだから。

……だが、今日の現国の担当はいささか虫の居所が悪かったようだ。

「俺をバカにしてるのか？　教室の前に突っ立って、大声で教科書読んで、何も見えてない間抜けとでも高をくくっているのか？」

彼が教壇を降りると、彼女は慌てたように広げていたノートを机の中に隠す。もちろん、彼女の動作はスラップスティックなコメディのように大げさで。誰もがその行動を観測する。

「おい、引き出しに閉まったノート出してみろ」彼女の机の前まで来た教師は、引き出しに腕ごと突っ込んだ無様な姿の馬場尚子を見下ろして。それでも馬場尚子は俯いたまま姿勢を崩さない。

教師は腕を上から彼女の前に降ろす。差し出す手のひらは蜘蛛の糸、彼女を救うためではなく、絡めとるための。

だが、馬場尚子はノートの要求に対して頑なに屈さなかった。

耐えかねた教師は「ほら、出せ」と机を二度ほど手のひらで強めに叩く。分かりやすい威嚇。分かりやすい敵意。

――故に。

彼女のような小心な被食者には、最大限の効力を発揮する。

「え、あ」

馬場尚子は怯え切って、ただそのままの姿で動けなくなってしまう。

そんな彼女に心底うんざりするように教師は警告を続ける。ほら、引き出しから腕を出せ。二拍叩く。いつまでそうしてるつもりだ。二拍叩く。

繰り返されるリズム。その度、馬場尚子は呻くように情けない声を吐き出す。
そんな問答の果てに耐えかねた教師は、ついに、
彼女の腕を、
掴む。

「嫌です。出しませんから」

誰のものとも分からないよく澄んだ声が、伝播する。教室の時間が凍る。
その場に居合わせた生徒たち、教師でさえも、皆が息を呑んで言葉を失った。
鈴の音のように凛としたその声、は、瞬間で全空間を掌握した。それだけの力があった。

そしてその沈黙を破ったのは他でもない馬場尚子当人だった。あっ、と自分で驚いた声を上げた後で、「ごめんなさい。あの、違くて、ごめんなさい」といつも通りの情けない鼻声に戻って。
ようやく我に返った教師は、「違くないだろ」と再度、彼は彼女の腕を掴んで引き出しから引き抜く。
「嫌です！　嫌です！」腕力では逆らえるはずもなく、彼女はみっともなく騒ぎ出す。
内職を隠したいのならば、せめて毅然とした態度で否定すればいいのに、彼女はひたすらに稚拙な駄々を繰り返す。
そうして、やがてむしり取られる、彼女のノート。
「返してください……」既に馬場尚子は泣き声で。
懇願すれど、それは叶わない。
「あのな、俺はお前の敵じゃないんだ。別にこのノートを焼こうってわけじゃないんだ。ただ、学校は小さいけど社会なんだよ。集団行動には規則が必要で、皆がそれを守っている。馬場だけが授業中に好きなことをしていい理屈はないんだ。だから、厳しいかもしれないけど、罰則は必要だ」
彼女のノートを片手に、教師は先ほどより落ち着いた口調で言い聞かせる。
「授業は退屈だって思うのも分かる。でも馬場は成績も上位ってほどじゃないだろ？　最近置いていかれてるんじゃないのか？　他の授業でも寝ている時が多いって聞くぞ。こういうのはクセがつくと、この先ずっと治せなくて取り返しがつかなくなるんだ」
「……返してください」
それでも馬場尚子は泣き声で縋り付く。どんな言葉も彼女には届いていない。
教師はそんな彼女を眺めていたが、一つため息をついて。
「馬場が一度でも俺の授業を真面目に受けたら返してやる」と諦めたように教卓へ戻っていく。
後には、馬場尚子のすすり泣く声が耳障りにも響いていた。

※※※

「なぜ人は食べてはならぬ木の実を食べるのか。開けてはならぬ匣を開けるのか。それは知りたいという欲求は劇薬だから。一匹の猫を殺すには、量子力学より好奇心さ」

モルフォは役者のように雄弁に語る。その言葉はいつもにも増して饒舌だ。

「あまつさえ奇術の種まで知りたがる。でもね、物事には作法というものがあるんだ。見境なくショーの裏を暴きたてる行為を知識欲なんて言葉で全て肯定するのは、いささか品に欠けるというやつさ」

Big Scary Cat　でも僕らには事実から完全に目を背けることはできない。事実は事実であるが故に強固だから。

——奇術を心から魔術だと信じることはできないように。それは僕らの限界であり、弱みかもしれない。

「いいのさ、空想だらけの狂騒でも。重要なのは、奇術を、奇術であると認めたままに愛して楽しむということさ」

Big Scary Cat　でも全てが架空なら、僕らは何を信じればいい？　モルフォ、キミは一体何者で、この場所は、キミのいう楽園は……。

「ボクは、彩翅モルフォ。それ以上でもそれ以下でもないさ。そこに何一つウソは介在しないよ」

モルフォの声は時折、驚くほどに決意に満ちるときがある。発声だけで、周囲の空間を振るわせるような力を行使する。そんな時、僕らはコメントを打つこともできず、ただ彼女の言葉に耳を傾けることしかできない。

「……この仮想の世界を、仮初の人格（ペルソナ）で馴れ合う三文芝居だなんて言う人もいるけどね。ボクはここが安っぽい仮面舞踏会（マスカレード）だなんて思わない。ボクはただ、『ボクの在りたいボク』でいたいだけ。『ボクが見せたいボク』でいたいだけ。それだけなんだ。
だから、私は仮装などしていない。今、君たちが見ているこの四肢、この貌、この翅こそが、私、彩翅モルフォの全てだ」

そう言い切ると、今度は少し弱った声で、独白を続ける。

「なんてね。……しかしね、本当はいつも不安になるよ」

Big Scary Cat　不安？

「私はこの場所においては紛れもなく彩翅モルフォだ。だが、こんなことを夢に見る。私は実のところ、ただ月光だけが差し込む、寂しさの森の地中で眠る一介の蛹で。
自分でも気づかないその背中には、ひっそりと寄生した冬虫夏草が茎を伸ばしている。今はただ消えていく自我の中で、午睡のようなまどろみが見せるそんな幻覚なのではないかって。
そんな夢が私なのではないかって—— ……

||

「ウワくんさ、おせーよ。面白い出し物に乗り遅れちゃってるよ」

教室で僕を迎えた佐藤は、いつものように購買の袋をひったくりながら言う。指さす方を見れば、黒板の方で人だかり。

その様相はアスファルトの上で屍体に群がる分解者を彷彿とする。

「とにかくさ、盛り上がってんだからウワくんも見てみろよ」

佐藤はしっかりと僕の肩を一度殴ってから、その輪に加わりにいく。僕は視線だけでそれを追うが、その延長線上、群衆の中心に掲げられた『何か』が興味を惹いた。

一歩ずつ近づくにつれて鮮明になる、クリップマグネットで黒板に両開きで貼りつけられたそれは。

紛れもなく、馬場尚子のノートだった。

「先生がさ、さっき馬場ちゃんのノート返しに来たんだわ。でも馬場ちゃん購買行ってて不在だからさ、教卓に置いていっちゃったわけ。で、この通りよ」

隣の佐藤は楽しそうにはしゃいだ声をだす。そんな彼とは裏腹に、周囲はその内容をやや退屈そうに眺めている。

「なんか、女の絵ばっかじゃね」

その通り、馬場尚子のノートには何ページにも渡って、とある少女たちが描かれていた。僕には、見開きが目についた瞬間に、このノートの正体を恐ろしく鮮明に理解してしまった。

ここに描かれた少女たち、それは——

「これ、Vtuber じゃん」

そう声を上げたのは、他でもない佐藤だった。

「なにそれ」

「YouTube でさ、アニメみたいな絵を使って喋ってるんだよ。自分の顔を出さないで、なんかキャラになったつもりで生放送とか、動画とかやってんだ」

へえ、と興味の薄い声があがる。

佐藤の言葉は正しい。そこに描かれていたのは、実際に活動している無数のバーチャル YouTuber たちだった

有名・無名問わず、大量の配信者たちのファンアートともいえるイラストが所狭しと並べられており、それらの絵の間にはその特徴や配信傾向といった細かいプロフィールまでメモ書きされていることもあった。つまり。

……つまり、このノートブックはバーチャル YouTuber のデータブックだ。

並みならぬ執念を持って収集・観察された、バーチャル YouTuber の図録である。

「つーか佐藤ってオタク？」

問われた佐藤は「いやっ、たまたま、偶然知ってただけで」なんてよくわからない言い訳。

「でも、やるじゃん。唯一自分より下なウワズリネズミくんに威張ってる以外にも見せ場あったんだ」

ひっでー。けらけらと周りから嘲笑の声が上がる。まあ、いいじゃん？　本当のことだし。と本人は軽くやり過ごす。

「あはは。い、言うなあ。きついわー」と佐藤は何事もないように無理に笑ってみせるが、そんな彼の言葉は誰も聞いていやしない。

「馬場ってそういうの好きなんだ」

その熱量は尋常ではないのだが、そんな価値も分からずに退屈そうに眺める大衆。

「つーか、なんか、雰囲気かわってね？」

古今東西のバーチャル YouTuber が節操なしに登場していたそのノートだったが、とあるページを境に、その図録は性質を大きく変えていた。

繰り返し、繰り返し、同じモチーフが登場するようになり、内容もファンアートというよりは設定画、またその背景説明のような文章が大きく紙面を割くようになっていた。
何が書かれているのか群衆を分け入ってノートに近づいて、
僕は呼吸が止まる。

――そこに描かれていたのは彩翅モルフォだった。

見間違えようもない。
僕が毎晩見つめている、よく知ったシルエット。いや、それだけじゃない。配信を一つとして見逃したことのない僕でさえ知らない、モルフォの生態が細部まで記されている。
衆目に視姦される彩翅モルフォの三面図。

その光景に僕は。
捉えられ、薬をうたれ、衰弱しながらピンを刺されていく標本昆虫を空見した。

気付いた時には僕は群衆を押しのけ、ノートの前に立ちふさがっていた。

「何？　根津」当然、その行動を問われる。極めて冷ややかに。
皆が見てる。
口が渇く。
喉が震えて攣る。
それでも、「返して」と一言。

喉を刻むように**僕**は言葉を発した。

「お前のじゃないけど？」伝搬する薄ら笑い。
「馬場尚子のノートだから、本人に、返さなきゃ、あの」
間髪入れずに、なんでフルネーム？　と笑う声が聞こえてくる。
「ウワくん、やめとけって。なに正義感だしてんだよ」
僕の横に出てきた佐藤が肩を掴んで引くけれど、僕は応じない。
――影薄いから普段気にしないけど、ネズミも見ててイライラすんのは馬場と変わんねーんだよな。
――佐藤もさ、よくこいつと付き合ってあげてるよな。感謝したほうがいいよ。佐藤がいなければ本格的に馬場と同じ扱いでしょ。
――まあ佐藤も空気読めなくて、部活やめさせられてるから、もう下がウワズリネズミしかないんでしょ。頑張って威勢張ってカースト上位ぶってんのが面白いけど。
飛び交う喧騒、頭が真っ白になって、それをかき消すように言葉を紡ごうとするけれど。
「だからっ、これ、本人にっ……」
「またウワずってるよ、声」そうして、ギャラリーの誰かが僕の声を真似する。沸き起こる嘲笑の波。
これは何度も繰り返された構図。
声が上ずるのは、人と喋ろうとすると、ストレスで喉が渇いて、痛みで痙攣して上手く発声できないからだ。

出来るだけ隠すため、僕は囁き声で喋るクセがついてしまった。
そうして人と避けて、教室の隅を歩いていたら、苗字をもじってネズミと揶揄されるようになった。
この教室にいると、誰からも醜いと笑われているようで、上手く息継ぎもできなくて。

Big Scary Cat やっぱり、こんな教室で僕の居場所は何処にも無い。

その時、大げさな音を立てて教室に入ってくる巨体、が混乱したような大声を。
「え、あ、それ私の」
話題の中心、その当人、馬場尚子だった。

僕はというと、ほとんど無意識に、皆がそちらへ注視した一瞬をついてノートをはぎ取り、走り出していた。
後ろからは僕の何倍も大きな足音で、馬場尚子がついてくる。

※※※

屋上につながる階段の踊り場で、二人、息を切らしていた。誰も追ってきやしないのに、後ろも振り返らずバカみたいに夢中で全力疾走してしまった。
いつにもまして鼻息を荒くする馬場尚子が気持ち悪い。だが、そんなことも気にならないほどに、僕は先ほどのノートの内容に気が動転していた。
そこには彩翅モルフォの全てが記載されていた。
まだ公開されていない配信の内容、話題、衣装、設定。つまり、モルフォのこれから。
「根津くん、の、ノート本当にありがとうね」
沈黙に耐えられなくなったのか、馬場尚子が息を荒げたままで喋り始める。
「わ、私、バーチャル、の、YouTuber が好きで……」だが、その言葉は何も聞こえてこない。ぐるぐると堂々巡りを繰り返す思考が、オーバーフロー寸前だった。

「あっ、あの、根津くんってさ、私の配信見てるでしょ」

……つまりはこの馬場尚子こそが、モルフォの。
そこまで考えたところで、僕の脳は激しい拒否反応を起こす。
そんなことはありえない。

ありえないんだ。

「つ、Twitter の DM で、さ、すっごい長文でいつも配信とかの感想、送ってくれる人いて、
なんか、ちょっと、こ、怖いなーってアカウン、ト、見たら、結構学校とかの愚痴ばかり書いてて、な、なんかすごい教室の感じ似てて……。あれ、根津くんでしょ。へへ、そうじゃないかって思って。いつも書いてる教室にいるぶ、不細工って、私の事でしょ？　ひ、ひどいなあ、なんて。嘘、嘘、冗談、本当のことだから、あは、はは。
あ、怖いってのは、なんか、へへ、比喩というか、あ、気分悪くしたらごめ、ごめんね」

「喋るな」

馬場尚子を見ているとどうしようもなく気持ちがかき乱されるのは。
無力で、無様で、無抵抗で、果てなく醜いからで、
――それはあの教室で、僕も同じだからだ。
PC をシャットして、黒くなったモニターに映る自分の姿を見てしまった時の、あの惨めな気分を思い出させる。
だから、僕は現実での悲惨な僕自身を否定するために、彼女も否定しなくてはいけない。

「喋るなよ、不細工」

僕は美しいものだけを信じる。それは、彩翅モルフォ。
僕は醜いものを憎む。それは馬場尚子、そして、
僕自身だった。

「モルフォじゃないだろ、お前は」

教室で、ノートに描かれたモルフォが晒されたとき。
彼女の翅を――あこがれの象徴を――むしりとられるような錯覚を覚えた。

「モルフォは……！　彩翅モルフォはお前のように醜い姿じゃないっ！　モルフォはそばかすなんてない！　自堕落な贅肉を身に着けてなどいない！　その滑稽なほどの短足でもない！　お前がモルフォの名を騙るな！」

僕は、その言葉で、馬場尚子の、彼女の外皮を一枚一枚、確実に剥がしていった。醜い、ドロドロとしたその中身を、素手で掘り起こすように。かき混ぜるように。
モルフォはこんなに気持ち悪い臓器を持たない。
モルフォはこんなに不潔な地面を這わない。
モルフォは。僕の愛した彩翅モルフォは。

二枚の蒼穹のごとき構造色を魅せ、その細長い腕を、脚を、蠱惑的に振るうたびに、オーロラのような鱗粉が舞う。
それは僕の世界で、たった一つの色彩だった。
僕の目の前にいる汚らしい冒涜的な肉虫などではない。

「そうだよ。その通りだ。まったくもって君のいう通りだよ」

唐突に。頬の産毛が逆立って、空間が震えたのを感じた。
視界の端で、蒼い鱗粉が舞うような錯覚。

蠱惑。まさにその言葉が表すそのものである、あの発声。
目には見えないが、彼女がどこかに居る。

「そうさ。彩翅モルフォはこれほどまでに醜くない。電脳世界でも随一の美しさを誇る、気高き少女に他ならない」

目の前の彼女は変わらず馬場直子の肉体で、しかしその声は紛れもなく彩翅モルフォだった。

「肉体としてのボクは無力な一介の青虫かもしれない。でも、USB カメラと、顔認識ソフトウェアと、二次元的な義体と、ライブストリーミングサービスがボクの羽化を可能にした。
……教室の隅で挙動不審に震えるネズミである君が、インターネットでは自由気ままな捕食者たる猫であると標榜するように。
ボクもこの不自由な肉体と、ルッキズムが蔓延する狭い箱庭から飛び去るのさ。仮想空間であれば、ボクは、自由に、鮮やかに舞うことができる。
実質（バーチャル）としてのボクになれる。
ボクの在りたいボク、ボクが見せたいボクになれる。つまり、ボクは電脳世界で成虫となる。

サイバネティック・メタモルフォーゼ
機器通信を経た完全変態

——それがボクの正体さ」

醜悪な肉虫から、モルフォの声が紡がれる様子は、今まで見てきたどんなバーチャル YouTuber の配信よりも現実味がなくて。
なのに、今、そこにある意思、思考は疑いようがなく、彩翅モルフォであった。
あれほどに焦がれたモルフォが、目の前にいる。
それを歓迎することは簡単だった。
画面の前で、毎晩貯めこんでいた、あの想いを伝えることは可能だった。
それでも。

——それでも、僕は目の前のそれを否定しなくてはいけない。

「お前がモルフォの『何』であろうと僕には関係ない。何であろうと、僕の答えは一つ。
……ただ一つ、目の前のお前はモルフォではない」
彩翅モルフォは、あの四肢、あの貌、あの翅をもって、飛ぶことができるのだから。
僕が目の前のこの不完全な存在を認めることは、彼女の翅にピンを打つことだ。
僕は標本箱のコレクションとして彼女を求めたのではない。
彼女は、僕の解き放たれた自由の象徴で、自由に、気ままに、彼女の楽園を舞っていて欲しかった。

そうして、僕は馬場尚子のノートを彼女の目の前に置いて、静かに背を向ける。
僕は馬場尚子を認めない。教室でも、彼女と喋ることはない。

――これからも、永遠に。

そして僕は今日も、帰宅し、就寝し、午前に起床する。
ルーティーンは何も変わりはしない。

配信時間より、少し早く起きたりもして、意味もなく深夜徘徊に出たりもして。そして定時になれば彩翅モルフォの配信を視聴する。
それは僕のただ一つの鮮やかな世界。

Big Scary Cat そして今夜も彩翅モルフォに恋をする。

後ろからは、穏やかな声で、一言。「ありがとう」、とだけ、響いた。

僕は振り返らず、声に出さず、モルフォに語り掛ける。

大丈夫、僕らは何も変わらない。
モルフォの言う楽園で、夢の中で。
僕らは変わらず二人、くるくると踊り廻る。
彼女が四肢を振るう度に世界は色めいて。朝が訪れることなど恐れなくてもいい。

乾きはもう、知らないから。

「私はこの場所においては紛れもなく彩翅モルフォだ。だが、こんなことを夢に見る。私は実のところ、ただ月光だけが差し込む、寂しさの森の地中で眠る一介の蛹で。
自分でも気づかないその背中には、ひっそりと寄生した冬虫夏草が茎を伸ばしている。今はただ消えていく自我の中で、午睡のようなまどろみが見せるそんな幻覚なのではないかって。
そんな夢が私なのではないかって――……

……でもね、そんな地中の惨めな私と、こうして自由に舞う蝶の私、どちらが夢で、どちらが現世だなんて、些細なことじゃないか。
――私は、これが夢でも歓迎さ。
君たちの前でこうして話している私は、紛れもなく彩翅モルフォで。

せめて夢のさめるまで、静かにはらはらとこの夢の楽園を飛んでいようじゃないか」

＜了＞

初出：2019/11　　COMITIA130